

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 5月24日現在

機関番号：12102
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2012
課題番号：23652030
研究課題名（和文）映画が辿るアルツハイマー型認知症の40年間 1973～2012年
研究課題名（英文）The Representation of Alzheimer's in Film, 1973-2012

研究代表者
今泉 容子（IMA-IZUMI, YOKO）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：40151667

研究成果の概要（和文）：

本研究は「日本のアルツハイマー映画」に着眼し、つぎの2つの成果をあげた。まず、1973年の第1号作品（豊田四郎監督『恍惚の人』）から今日までのアルツハイマー映画において、「アルツハイマー患者と介護者の人物造形」と「彼らを取り巻く社会環境」を検証したこと。これによって、日本のアルツハイマー型認知症の「映像表象史」が構築できた。つぎに、2000年代に入って盛んに制作されている「外国」のアルツハイマー映画をパースペクティブに入れ、「日本」のアルツハイマー表象と比較考察を行い、日本独自のアルツハイマー表象を浮き彫りにすることができた。

研究成果の概要（英文）：

This project explored the way Alzheimer's disease was depicted in Japanese films in 1973-2012, focusing on changes in the relationship between patients and their carers. It also pursued a comparative study of Japanese film and various overseas films, such as British, American, Indian, and Chinese films, in order to clarify the characteristics of the Japanese way of representing Alzheimer's.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：アルツハイマー、映画、認知症、患者、介護者、表象、福祉施設、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

アルツハイマー型認知症はだれもが罹りうる病気として、多くの映画のなかに描かれている。アルツハイマー映画は日本が 1973 年に世界初の作品（『恍惚の人』）を公開したが、日本映画が辿るアルツハイマーの変遷を本格的に研究した例は、まだ存在しなかった。本研究の第 1 の目的は、日本の 40 年間のアルツハイマーを取り巻く家族像・社会像の変遷を体系化し、「アルツハイマー映像表象史」を構築することであった。第 2 の目的は、2000 年代に興隆した「外国」のアルツハイマー映画に目を向け、日本と外国のアルツハイマー映像表象を比較分析することであった。本研究によって、「映画研究」が「老年学」という学際的領域に貢献しうることを示そうとした。

そもそもアルツハイマー型認知症（アルツハイマー病、AD=Alzheimer's Disease）は、アロイス・アルツハイマーが 1901～06 年にアウグステ・データ（当時 51 歳）を診たときに認定されたばかりで、その全貌は解明途上である。その未知の部分が多いアルツハイマー病を、世界に先駆けてスクリーン上に描き出したのが、日本であることに、本研究は着眼し、「日本のアルツハイマー映画」の研究を確立しようとしたのである。

2. 研究の目的

本研究はつぎの 2 つの目的をかかげて、それらを遂行した。

(1) 1973 年の第 1 号作品（豊田四郎監督『恍惚の人』）から今日までのアルツハイマー映画の作品を対象とし、「アルツハイマー

患者と介護者の人物造形」と「彼らを取り巻く社会環境」を検証すること。とくに、「患者」と「介護者」の関係が初期から今日にいたるまでに大きく変化している点に注目し、日本映画のアルツハイマー表象史を構築しようとしたのであった。

(2) 2000 年代に入って盛んに制作されている「外国」のアルツハイマー映画をパースペクティブに入れ、(1) で解明した「日本」のアルツハイマー表象と比較考察を行うこと。これによって、「日本」と「外国」のアルツハイマーをめぐる「家族像」や「社会像」を比較分析し、日本独自のアルツハイマー表象を浮き彫りにすることを目指した。

3. 研究の方法

2 年計画の本研究は、日本と外国のアルツハイマー映画を研究対象とし、アルツハイマー映像表象史を構築するために、日本のアルツハイマー映画を収集したのち、それらに「ショット分析」をほどこしながら、必要な要素を検出する方法をとった。具体的にいえば、1973 年から今日までのアルツハイマー映画において、つぎの 2 点に関するデータを検出する方法をとったのである。

(1) アルツハイマー患者と介護者は、どのような人間関係（家族関係）にあるか？

その関係は、一篇の映画のなかで、どう変化するか？

(2) 患者と介護者を取り巻く社会環境は、どのように設定されているか？

上記の 2 点に関するデータを日本映画のなかに検出したあと、対象を外国映画に定めて、日本映画にほどこしたのと同様のショット分析を実施しようとした。それは「ア

「アルツハイマー」を映画のなかに検証するためであった。もっとも外国映画の場合は、2000年に入ってからアルツハイマー映画の制作が本格的にはじまったため、歴史と呼べるものが10年そこそこしかない。それでもアメリカ、イギリス、カナダ、中国、韓国、インドでは、著名なアルツハイマー映画が登場しているので、それらの映画（日本で未公開の映画もある）を収集することから出発し、ショット分析を実施したのである。

最後に、外国映画にみられるアルツハイマー表象を日本映画のそれと比較することによって、日本独自のアルツハイマー映像表象を明らかにしていったのであった。

4. 研究成果

本研究によって、日本が世界に先駆けて生み出したアルツハイマー映画の表象史を構築することができ、日本独自のアルツハイマー映像表象の特徴を明らかにすることができた。

研究成果としてまず挙げることができるのは、日本のアルツハイマー映画が誕生時の1973年から今日までの40年のあいだに、「患者像／介護者像」を大きく変化させてきたことを明らかにしたことである。初期の映画では、患者はいつも高齢の「男」であった。そして彼を介護する者は、いつも女（義理の娘）であった。本研究はその後の変化のなかで、1980年代の終わりに患者が高齢の「女」になったことを突き止めた。そして、アルツハイマー映画に変化を引き起こした時代の要求を考察し、患者像の変化の必然性を明らかにした。

アルツハイマー患者が「女」に変化すると、

介護者が「男」（患者の夫）に変化することも解明した。とつぜん男・女の逆転が起こったのであるが、この現象はジェンダーの視点に立った文化論から容易に説明がつかなくとも明らかにした。

さらに2000年代になると、介護者像はさらに複雑に多様化していくことも、本研究によって明らかにできた。アルツハイマー映画に反映された「患者像」「介護者像」「家族像」「社会像」の変貌が解明できたことが、本研究の大きな成果のひとつである。

さらに、本研究は家族関係だけでなく、社会環境の一要素としての「福祉施設」にも注目した。アルツハイマー関連の「福祉施設」の意味と役割は、アルツハイマー映画の初期から今日にいたるまで、大きく変化している。初期には、患者をベッドに縛りつけ、鬼のような仕打ちをする恐怖の空間が出現したが、今日では患者の個性を尊重し、潜在能力を引き出そうとするデイケア施設が多く登場する。それは一例にすぎないが、さまざまな「社会環境」を検出し、初期から今日までの変遷が明らかにできた。

外国映画と比較することによって、日本映画におけるアルツハイマー表象の独自性を浮き彫りにさせようという意図があったが、予想以上に日本映画が外国映画のアルツハイマー表象に与えた影響が大きいことが明らかになった。日本と外国のアルツハイマー映像比較は、今後も継続して行いたい研究であり、本研究は良好な研究基盤を形成するのに役だった。

映画の読解のプロセスにおいて、無数ともいえる「ショット分析」を実践したが、それは膨大な映像データとして保存してある。これはいずれ、アルツハイマー映像表象のデータベースとして、ほかの研究者たちと共有したいと考えている。その共有の具体的方策を

現在、思案中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

(1)

今泉容子、「日本映画が辿るアルツハイマー型認知症——2000年～2010年」、『地域研究』第33号、2012年、71-92頁、査読有り。

(2)

今泉容子、「日本映画が辿るアルツハイマー型認知症の30年——1970年代～1990年代」、『国際日本研究』第2号、2011年、39～78頁、査読有り。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今泉容子 (IMA-IZUMI, YOKO)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40151667